

長野県立歴史館たより

2021年 秋号 vol.108

特集

秋季企画展

全盛期の縄文土器

— 圧倒する褶曲文 —



令和3年度秋季企画展

2021年9月18日(土)～11月23日(火・祝)

緻密な褶曲文、それは5000年前からこの
地に住んだ人々の堅実な気質が生んだ技

全盛期の縄文土器

しゅうまきよもん
圧倒する褶曲文

1万3000年以上続いた日本列島の縄文時代の文化を代表する土器の多くは深鉢で、鍋として使われました。ただ、つけられた模様は作る集団を示す旗印のような意味をもち、遠くの土器間の類似性は集団間の関係を映す鏡ともいわれています。今からおよそ5000年から4900年前の縄文時代中期の土器には、器面の文様が複雑で、器面から飛び出した把手の造作にかなりの手間がかけられたものが多くみられます。今回の企画展では、甲信越地方の、この時期の土器を展示し、それぞれの造形の特徴を紹介するとともに、そこから想像される集団間の関係を考えてみます。

動物絵の伝統と緻密な褶曲文

5100年ほど前、中央高地(本州中央部の山地と盆地で、主に山梨・長野を指す)では、土器にヘビ・カエルやイノシシ、ヒトなど、生き物の形を模した装飾が盛んにつけられていました。それらは集団ごとの守り神である「トーテム」を意味していたかもしれませんが、子どもたちに当時の人びとにとって大切な動物に関する知識を伝授するための教科書の役割をしていたのかもしれません。

5000年前、中央高地では前時代からの伝統の上に独特な土器が誕生します。それが波状の口縁部の下に、地層のうねりのように褶曲する波状文を幾重にも配した「しゅうまきよもん褶曲文」土器で、胴部には前時代に始まる半円形の「くしがたもん櫛形文」がつけられることもありました。

いっぽう動物文様が流行しない東北信の千曲川流域では、口縁部から大きなドーナツ形の突起を立ち上げ、胴部には横にながれる模様をつけた焼町式土器が流行していました。その後、焼町式土器の最末期の把手の流儀に火焰型土器や王冠型土器の文様を取り込んで、円環形突起をもつ水煙文土器が誕生します。これらは、岡谷・茅野では褶曲文土器と同じ堅穴住居跡から出土することから、ほぼ同時期に使われたものとみられます。

水煙文土器の極盛

水煙文土器にはS字やC字状の円環を組み合わせ、雪解け水を集めた急流にできる渦巻きを現したような一派(円環形:表紙右上)とともに、突起の頂部がモンブランケーキのような螺旋を描く一派(渦巻ドーム形:右写真)



岡谷市梨久保遺跡の褶曲文深鉢
(市立岡谷美術考古館蔵・写真提供)



笛吹市釈迦堂遺跡の水煙文土器
(釈迦堂遺跡博物館蔵・写真提供) 重要文化財
※9月26日までの限定公開

があります。当初の高さは40cm程度でしたが、その後大形化が進み、甲府盆地では80cmを超えるものも出現しました。甲州市安道寺遺跡^{あんどうじ}では把手を故意に割り取り、土器とともに穴に収めた祭祀的な行為も認められます。手間暇かけて立ち上げた突起には何か特別な意味が籠^{こも}っていたのでしょうか。

水煙文のルーツはどこに？

5000年前に唐突に出現した水煙文土器（円環形）のルーツには、焼町式土器、井戸尻式土器^{いどじり}、火焰型土器・王冠型土器などが考えられます。特に、焼町式土器の最末期に位置する塩尻市上木戸遺跡台付鉢（右写真）のように、把手を起点に円環を複数段積み上げる流儀は、円環系水煙文土器にかなり近い形態といえます。また、単純に円環を積み上げただけでなく、その間に溝を入れてうねらせていく手法は、東北南部から新潟県域に広がる大木8 a 式の技法を取り入れています。



塩尻市上木戸遺跡の台付鉢（当館蔵）

火焰型土器文様の南下

火焰型土器は極めて高い斉一性^{さいいつせい}や特殊な造形から、祈りの土器といわれます。水煙文土器の胴部に共通してみられるS字^{きよし}と鋸歯文は、おそらく火焰型土器や王冠型土器から取り入れたものでしょう。このように広域的な土器文様の伝達は、人びとの活発な交流を表しています。

でもただそれだけでしょうか。火焰型土器という特殊な土器に込められたなんらかの力を、中央高地の人々が必要とし、それを認められた結果、文様が分与されたとしたら。次第に寒冷化が進む不安な環境の中、人びとは褶曲文や渦巻文の力を授かった鍋で、ようやく採取できた食料を煮て食べ、自らの命を燃え立たせていたのではないのでしょうか。

全盛期の土器の時代はおよそ80年で幕を閉じますが、そのルートをたどって今度は中越地方から北信の土器文様が南下してきます。中信から諏訪地域では、それ以前の動物主体の土器文様が大きな変化を遂げ、植物文様をモチーフにした「唐草文系土器」が誕生したのです。

その他の展示

第2展示室では当館で所蔵する縄文時代草創期から晩期の代表的な土器を、廊下パネル展示では土器の修復について取り上げます。特に今回展示する土器の一部は、27年前の開館以来、脆弱遺物^{ぜいじやく}の修復に用いてきたエポキシ系の素材で復元されたものです。縄文土器の造形とともに、圧倒する土器復元の技を、展示品を通してじっくりとご観覧ください。（水沢教子）



Photo by Ogawa

口縁部直下から縦にS字・鋸歯文をもつ
十日町市笹山遺跡の王冠型土器
(十日町市博物館蔵・写真提供) 国宝



聖護院門跡道増寄進状（当館蔵）

2019（令和元）年に佐久市の大井道也さんから、「大井法華堂文書」約4,200点を寄贈していただきました。明治維新後、修験道が廃止されたこともあって、地方の修験道関係文書で、これだけまとまって残った例は珍しいといえます。

大井法華堂は、佐久の大井荘の地頭だった大井氏の一族によって創建されました。当初は霊地である紀伊国熊野（和歌山県）へ旦那（信者）を導く地域の修験者の一つでした。15世紀の法華堂では次第に地域の旦那を顧客化し、いわば利権（株）として周辺の修験の所有する権利を集積していきました。こうした修験のテリトリーを「霞」といいます。霞を拡大した大井法華堂。佐久・小県地域では一頭地を抜く存在となります。そもそも修験道は厳しい自然に対する畏敬の念からスタートしています。この地域の修験は浅間山の火山信仰に根ざしていたと思われます。

中世から近世の修験道は、聖護院を本山とする「本山派」、醍醐寺を本山とする「当山派」の二派にわかれ、それぞれが勢力拡大に力を注いでいきます。とくに聖護院は第4代静恵が後白河天皇の皇子で入寺したことから寺格が門跡寺院と位置づけられました。全37代の門跡中、なんと25人が皇室や公家から門主として迎えられています。聖護院門跡と呼び習わされる所以です。

大井法華堂文書のなかで中世文書は40通ほどありますが、そのなかに門跡からの寄進状が1通だけ遺されています。その主は道増。ときの関白近衛尚通の子で、1510（永正7）年に正式に門跡となっています。以後戦国大名伊達氏や北条氏、毛利氏などと交わり、地域紛争の調停にあたるなど活動を活発にした著名な人物です。

道増と2代前の門跡道興は、京都から東国を廻国し、地方の修験者を取り込んでいったことが知られています。23代門跡道興は、浅間山の膝下に滞在した際、上野国側からこう歌に詠みました（『廻国雑記』）。

今は世に 煙を絶えて信濃なる

浅間の岳は名のみ 立ちけり

浅間山は、修験道の開祖役行者の険しい修行地でもあるとされ、きわめて重要な山として知られていました。道興が見た浅間山は、荒ぶる山でなく、このときは煙がなかった模様です。



浅間山遠景（軽井沢町大日向付近）

また25代道増は、地域の有力な修験者に補任状を発給していきます。佐久・小県地域の修験の中心だった法華堂堂主源春も、門跡から先達職に任じられ、同行（末端の修験者）から銭を徴収・上納する役割を求められました。道増の時代に本山派が地域の頭レベルの修験者を積極的に取り込み、教団を拡張しつつ、地域の同行を底辺にしたピラミッド型の集金システムを作り出していった様相が見て取れます。冒頭写真は道増が法華堂に太刀を寄進した際の文書です。（村石正行）

水田と鳥形土製品



川田条里遺跡の鳥形土製品（当館蔵）

長野市川田条里遺跡から出土した2点の鳥形土製品があります。中近世の水田の流路跡と、水田に面した建物跡の土台から出土し、当館で所蔵していますが、これまで展示されたことがありません。高さ3.3cmと3.6cmの小形品で、東京土産の銘菓にどこか似ています。（写真）

遺跡で見つかる鳥の造形は、弥生時代以降に一般的となり、弥生時代では銅鐸の絵画などにみられ、古墳時代には鳥形埴輪、鳥形木製品など鳥の造形の種類も増えます。奈良時代以降では遺跡から出土する遺物の他に、宮内庁所管の正倉院に納められている豪華な鳥の意匠など、現代にいたるまで鳥の造形物は多数残されています。

縄文時代の鳥の造形は、土笛形土製品、土器の装飾にまれにみられるのみで、遺跡で見つかるのはもっぱら食糧となった鳥たちの骨です。

川田条里遺跡の2点の鳥形土製品は、素焼きの土人形で、底に竹串が刺させるような穴が開いています。中野市川久保遺跡の事例には穴がないのですが、水田跡で出土したものです。鳥形土製品は、水田で豊作を祈るための道具として使われた可能性があると考えています。

類似資料は少なく、長野県内では前述の3例の

み、県外では山梨県諏訪原遺跡、寺前遺跡、足原田遺跡、兵庫県兵庫津遺跡などの集落遺跡で中世から近世の鳥形土製品が出土しています。県外の事例は水田跡で出土したものではなく、同じ用途のものかどうかわかりません。いずれにしても、類似資料は極めて少ないのです。なぜ類例が見つからないのでしょうか。中近世の水田跡を調査することは稀で、鳥形土製品が発見される機会がないことがひとつの理由です。



川田条里遺跡の水田跡調査

当時は誰もが知っているものでも、その習俗が途絶えてしまえば、考古資料を読み解くことは難しくなります。考古学者森浩一さんの著書『古代史の窓』に、「伏見人形」というエッセイがあります。畿内の事例ですが、伏見人形を持ち帰り豊穰を祈り田んぼに埋めたという民俗例がかつてあったそうです。川田条里遺跡の鳥形土製品も、そのようなものであったと想像しています。

考古資料を読み解くためには、民俗学、文献史学など考古学以外の分野との連携した調査研究が必要です。水田から出土した鳥形土製品の探求は、これからも続きます。

（鶴田典昭）

1 織機の変遷

上伊那郡宮田村の民俗学者向山雅重氏（1904～90）は著書『続信濃民俗記』の中で機織り機の変遷について次のように記しています。

「腰掛けていて機織りする手機を『高機』というが、この高機の入ってくる前に一般に行なわれていた手機は、腰を低く下ろし、両脚を前方へ投げ出すようにし、右足へツリツナの先を引かけ、それを前後にひくことにより、マネギを上下させ、これでアスピを上下させて機の口をあけていく織り方のもので、これを『地機』と言う。」

向山氏は高機が信州に入ってくる前に普及していた機織り機が地機であると指摘しています。縦糸を引き上げ、横糸を通すスペースを作り出す綜統（あすびとも言う）の枚数を増やすことで、高機は地機よりも複雑な織り方が可能となりました。

信州ではいつ頃高機が普及し始めたのか、調査を進めると江戸時代後期に高機が普及していったことがわかりました。明治期には農家の副業として機織りを広げるために長野県各地で高機が造られるようになり、高機を使った講習会も開かれるようになりました。（拙稿「近世から近代における信州の高機」『長野県立歴史館研究紀要第4号』1998年）。



地機（中枠式水平型地機）

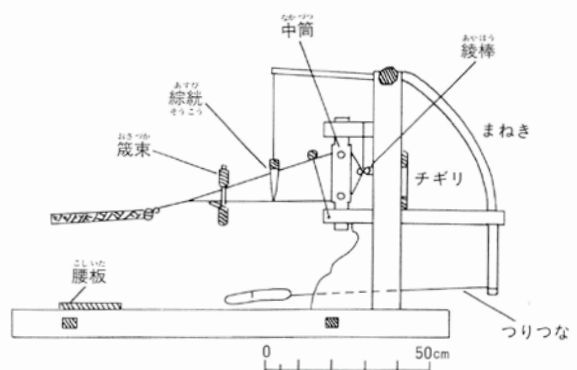
2 信州の地機の特徴

地機には大きく分けて土台が水平なもの（水平型地機）と傾斜したもの（傾斜型地機）の2種類があります。日本の東日本が水平型地機、西日本が傾斜型地機でその境は信濃国と飛騨国付近にあります。信濃国は水平型地機の文化圏に入ります。

地機には縦糸をわける中筒という装置が付いているのですが、その形状から水平型地機はさらに3つに分類できます。木曾地方の地機は、中筒の部材を横から見ると三角形に見えるところから三角式水平型地機に分類されます。中信から北信にかけては、中筒が二本の棒で構成されている二本棒式水平型地機と、中筒が枠にはまった中枠式水平型地機の2種類が混在します。

写真の機織り機は、中枠式水平型地機で1998（平成10）年に、下水内郡栄村の旧家から寄贈していただいたものです。越後縮や越後上布といったカラムシという麻繊維で織られた着物はこの中枠式水平型地機を使って織られました。新潟県十日町市博物館などに多く収蔵されています。

（小野和英）



地機の各部分の名称（二本棒式水平型地機）
（作図：小野和英。名称は松沢かね『織りへの誘い』を参考にした。）

県立歴史館では、平成29年度より冬季の企画展として、長野県ゆかりの近代の人物に焦点を当てた展覧会を開催しています。これまで、飯田生まれの「博物館の父」田中芳男、安曇野市在住の写真家・田淵行男、伊那市ゆかりの洋画家・中村不折の多彩な業績をご覧いただきました。

今年度、冬季企画展で取り上げるのは、東御市生まれで、明治後期から昭和戦中期までの洋画界を代表する水彩画家・丸山晚霞（まるやまばんか、1867～1942）です。丸山晚霞は、1867（慶応3）年小県郡^{ねづ}祢津西町（現東御市）に生まれました。

1888（明治21）年上京し、画塾・^{しやうぎどう}彰技堂に入り、明治洋画の先駆者^{ほんだきんきちろう}本多錦吉郎に師事して洋画の初歩を学びます。やがて、郷里信州の風景を描いた水彩画によって世に知られるようになった晚霞は、1900（明治33）年^{かのこぎたけろう}鹿子木孟郎、^{みつたにくにしろう}満谷国四郎らとともに片道切符と自作を携えてアメリカに渡ります。彼らは全米各地で水彩画展を開催して大成功を収め、ヨーロッパ留学の資金を得ることができました。日本人による洋画が、はじめて水彩画の本場英語圏で認められた瞬間でした。

帰国後は、太平洋画会（明治35年）や日本水彩画会（大正2年）、そして日本山岳画協会（昭和11年）の創立会員となるなど、水彩による風景画の制作と普及に尽力しました。1942（昭和17）年小県郡祢津村で死去、没後に開催された遺作展示では、「郷愁の画家」と評されました。2022（令和4）年3月4日は、丸山晚霞の没後



《高原の秋草》（明治時代、水彩、丸山晚霞記念館蔵）



《杏花の里》（水彩、丸山晚霞記念館蔵）

80回忌にあたります。

「透明水彩」というイギリス伝来の技法を駆使して日本の風景画の魅力を広めた晚霞は、最期まで郷里・祢津村を拠点に制作をつづけ、郷里信州の田園風景に普遍的な美しさを与えました。それまで顧みられることもなかったありふれた田園風景は、晚霞に描かれることではじめて美しい景観となったともいえます。

一方、晚霞はアメリカ経由でヨーロッパ留学を果たした先駆者でもあり、国際的感覚を身につけていた彼の作品は、水彩画の本場イギリスやアメリカでも高い評価を受けています。

本展は、風景画の代表作を一堂に展示し、明治の日本に思いをはせてもらうと同時に、今も我々に強くうたえてくる作品の力の源泉を探ろうとするものです。加えて、明治20年代に相次いで来日した英国人水彩画家や、吉田博、^{みやげこつき}三宅克己など同時代に活躍した水彩画の名手といわれた画家を併せて紹介します。さらに、長野県内の取材地については現状の写真を適宜展示し、「現代」の視点も取り入れながら、「景観」がかけがえのない郷土の財産であるというメッセージを発信したいとおもいます。（林 誠）

*会期中、作品の展示替えをおこないます。

Information

会 期 ● 2022（令和4）年1月15日④～2月27日⑥
 開館時間 ● 午前9時～午後4時（入館は午後3時半まで）
 観 覧 料 ● 企画展のみ300円（大学生150円）
 *高校生以下無料。講座聴講は常設展観覧料が必要
 連携企画 ● 「水彩の明星」展
 10月30日～12月26日 丸山晚霞記念館

9月

休館日
6・13
21・24
27

秋季企画展

全盛期の縄文土器

— 圧倒する褶曲文 —

9月18日(土)～11月23日(火祝)

関連イベント(すべて事前予約制)

■講演会

「4900年前の大変動：

地域集団の再編」

講師：安斎正人氏 (元東北芸術工科大学教授)

9/26(日) 13:30～15:00

*80名定員、講座券(常設展観覧券)必要
於：講堂

■講座

「褶曲文の技と水煙文土器の誕生」

講師：水沢教子(当館学芸員)

11/6(土) 13:30～15:00

*80名定員、講座券(常設展観覧券)必要
於：講堂

■ミニトーク

「土器にみえる動物文様」

講師：柴田洋孝(当館学芸員)

10/2(土) 11:30～12:00

「炭素窒素同位対比による煮沸対象」

講師：鶴田典昭(当館学芸員)

10/30(土) 11:30～12:00

「水煙文土器の修復」

講師：白沢勝彦(当館学芸員)

11/6(土) 11:30～12:00

*いずれも15名定員、
企画展観覧券必要

於：展示室または第一研修室

■こども体験講座

「土器の胎土を偏光顕微鏡でのぞこう」

10/30(土) 13:30～15:00

*お子様と保護者10組

於：第一研修室

保護者は企画展観覧券必要

講座・イベント

古文書講座

初級 A 第4回 9/ 5(日)
B 第4回 9/ 9(木)
中級 A 第4回 9/ 4(土)
B 第4回 9/ 9(木)
上級 第5回 9/18(土)

信州学出前講座in飯山

9/11(土) 13:30～15:10

古文書講座

初級 A 第5回 10/ 3(日)
B 第5回 10/ 7(木)
中級 A 第5回 10/ 2(土)
B 第5回 10/ 7(木)

古文書フォローアップ講座

初級 10/24(日)
上・中級 10/23(土)

遺跡探訪会 10/ 9(土)

信州学出前講座in上田

10/16(土) 13:30～15:10

開館記念日

11/ 3(水)

考古学講座 第4回

11/20(土) 13:30～15:00

「災害と時代の変化～浅間火山～」

講師：近藤尚義(当館学芸員)

信州学出前講座in安曇野

11/27(土) 13:30～15:10

クリスマスリースづくり

11/28(日)

考古学講座 第5回

12/11(土) 13:30～15:00

「時代の画期と暮らしの変化2」

講師：町田勝則(当館考古資料課長)

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、講座・イベント等につきましては、状況により急遽中止とさせていただきます。

表紙写真の解説

右上：富士見町曾利遺跡出土深鉢

(円環形水煙文、曾利I a式) 長野県宝
井戸尻考古館蔵・写真提供

右下：十日町市笹山遺跡出土深鉢

(橋状把手装飾、大木8b式古段階) 国宝
十日町市博物館蔵・写真提供

左：茅野市棚畑遺跡出土深鉢

(褶曲籠目文、梨久保B式) 長野県宝
茅野市尖石縄文考古館蔵・写真提供

約5000年前の東日本を代表する土器型式に属する3点の土器です。口縁部に透かしの入った把手をもつ右上と右下の土器に対し、左の土器には把手がありません。その代わりに、ち密で幾何学的な模様が、粘土紐の貼り付けによって器面一杯に描かれています。これら深鉢形土器には焦げや煤がついていることが多いことから鍋として使われていたことが分かっています。

行事アルバム

***** 信州学講座 *****



第2回目は「伝えられなかった災害」(当館学芸員 林誠・6月12日(土))、第3回目は「近くて遠い人と水」(県埋蔵文化財センター 寺内隆夫氏・7月3日(土))と題して講演を行いました。

両日ともに50名ほどのご参加をいただきました。「面白かった。時間が短いと感じた」等、好評をいただきました。年内の信州学講座はこれで終了となりますが、いただきました感想をもとに、来年1月から講座を再開していきます。

長野県立歴史館たより 秋号 vol.108

2021(令和3)年8月1日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail : rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ : <https://www.npmh.net/>

印刷 奥山印刷工業株式会社

12月

休館日
6・13
20・
27～31